

令和5年度投稿

俳句

(四月)

城山の 景色眺めて 翔ぶが如く

(城山 大久保一蔵)

花冷えも 胸の熱さや 桜島

(城山 橋口そのみ)

新緑の 見事美し 仙巖園

(仙巖園 しば たま)

葉桜や 島津の殿の 遠眺め

(仙巖園 宮澤羅夢)

ちゃんぼもち ひこうきぐもが にほんだな

(仙巖園 無記名)

桜島・ひこうき雲に・とどく夏

(仙巖園 よよよ)

ぷち登山 秒速一步 こりゃきつい

(城山 なむしう)

ザビエル カゴシマニキリスト ツタエル

(城山 ヒフミ・

ワゾウスキー)

(五月)

荒い息 遠くに霞む ベリッシマ

(城山 惠村甲子朗)

立ち向かえ 勇敢な背や 初夏の雨

(城山 えいこ)

春雨に 想いを馳せる 西郷のこえ

(仙巖園 中村風樹)

大木の見つめる先に桜島

(城山 りよこちゃん)

柿若葉目の前おわす桜島

(仙巖園 姫りんご)

綺麗だな鹿兒島の夜景また来たい

(城山 千利休)

何思ふ あゝ絶景かな 桜島

(城山 おおちゃん)

桜島、よいよいよ、桜島

(城山 藤田)

(六月)

城山の いにしえおもう 初夏の風

(城山 森千恵子)

時雨かな 薩摩の国に 咲く紫陽花

(仙巖園 峻嶺)

五月雨に 耐える紫陽花 薩摩武将

(仙巖園 峻嶺)

春蟬の 声がひろがる 仙巖の山

(仙巖園 ふく)

梅雨の晴れ 揺れの故郷 楽しけり

(城山 ゴーゴーマミー)

城山の 楠いや高し 青時雨

(城山 春宮宗淳)

せごどんの 頭にリボン 赤とんぼ

(南洲 増田天志)

赤とんぼ 次は城山 洞窟前

(南洲 増田勝巳)

(七月)

花梯 梧いま靄を脱ぐ桜島

(仙巖園 篠原新治)

青空に煙が映える桜島

(城山 とのきんぐ)

岩肌と自分の肌をくらべっこ

(仙巖園 あき)

甲突の 夜の水面に 踊る光

(維新ふるさと館 なかちや)

展望台 望遠鏡で 遠くまで

(城山 片平 菜月)

蝉時雨 桜の島に響く声

(城山 佐藤 一心)

(八月)

城山で セミのぬけがら ゲットだぜ

(城山 山本奏羽)

嵐だが 主役はいつも 桜島

(城山 あおぼん)

城山と 夏の風吹く 桜島

(城山 しおりんご)

終戦の日 家族とともに いれる幸せ

(南洲 さきはら)

夏の日の 光の写る 錦江湾

(城山 鳩山保歩)

日差し受け 揺れる鈴と 君の汗

(仙巖園 カギサ)

(九月)

炎天に 長年耐える 壺畑

(南洲神社 ジューンスロップ)

我望む 周防も まみゆ 桜島

(城山 勤皇志士)

旋回の 鷹の陰差す 仙巖園

(仙巖園 川越のしよび)

白萩や 銃弾の跡 なでる風

(南洲神社 青葉 有)

青い海 船が向かうは 桜島

(城山 ひなふく)

雨降って 何も見れない 私達

(仙巖園 許田夏太郎)

散りたるや 落ち葉に透けし 煙む桜

(城山 平安山真似子)

(十月)

展望台 夢中で登って 暮れなずむ

(城山 大塚 誠)

(十一月)

我老えど 母との来鹿は 宝なり

(城山 開明子)

城山の 落ち葉の行方 皆知らず

(城山 小泉八雲)

秋の陽を 浴びてかがやく 桜色

(城山 k k o k)

娘っ子 じじばば連れて 桜島

(仙巖園 村上誠典)

思い出に 一步踏み出し 山登り

(城山 千葉の東郷)

桜島 噴煙を背に 鷹舞へり

(仙巖園 菅原ゆかり)

白雲を吐く 山眺めて 言うことなし

(城山 ぽんぼこぽん)

(十二月)

古き良き つながる歴史 大噴火

(仙巖園 おすし)

幽天が 挽歌を奏でる 桜島

(仙巖園 村上幸生)

城山で 夜景をみてたら もう朝だ

(城山 下村みづき)

屠蘇気分 カルデラの湯の 桜島

(城山 山下一夫)

西からの 風を感じて 藩士いく

(城山 しゅんたどん)

クリスマス 父とふたりで 夜景見る

(城山 ぺんはむ)

着膨れて ベイマックスに 見えもんど

(城山 城山花道)

(一月)

歴陣の 足音辿れば 俺も行ける

(仙巖園 いぐたろう)

新春に 願いを込めて 昇り龍

(城山 はるあを)

桜島 眺めし 挑む 桜咲く

(城山 あおはる)

錫門の 錫に日当たる 初景色

(仙巖園 堀内咲子)

(二月)

鬼は外 霧島神宮 福つかむ

(城山 つるちゃん)

再訪です 最高なのです 西郷です

(城山 お城マスター)

紅白の 梅を 脇侍に 獅子灯笼

(仙巖園 中西久美子)

百寿母 兄弟集む 薩摩路に

(城山 くるみ)

桜島 夜風と共に なに思ふ

(城山 りっくん)

西郷どんも 火山も太き 春薩摩

(城山 村上空夢)

赤日正当空 城山远望桜の島 青木不知冬

(城山 张紫熙)

展望台 登ってびっくり 桜島

(城山 ささっきー)

桜島 煙の先に 青い空

(城山 岡田光道)

鹿児島よ 初めての土地 楽しいな

(維新 みづを)

壮大な 心綺麗に 洗われて

(仙巖園 こたを)

台湾より 見る桜島から 歴史思ふ

(城山 テン)

緑もゆ でっかいおにわ 仙巖園

(仙巖園 もり)

(三月)

若人は 砂踏み諦めて 春を嗅ぐ

(仙巖園 きしよべ)

茶の泡や 揺らすはレールと 潮の音

(仙巖園 かねしま

はると)

ワンコイン 寂しなる冬 垣間見ゆ

(城山 なかむら)

城山に思う 影みる 秋の月

(城山 オムライスで
ロングブザービート)

城山公園 雨の中散策も 趣あるな

(城山 無記名)

庭園の 桜を彩る 桜島

(仙巖園 中川りさ)

城山や はるか彼方の 白煙

(城山 徳重裕武士)

桜島 霞かかりし 夢の色

(城山 月影ふあ)

錫瓦 ふりさけ 見れば 花曇り

(仙巖園 せいせい)

川柳

(四月)

よくぞここ いてくれたなり 桜島

(城山 橋口そのみ)

いにしえも 屋久杉御用 仙巖園

(仙巖園 しば たま)

(五月)

棒の足 休ませ眺める 桜島

(城山 きなこもち)

薩摩にて、新緑にふれ、緑をしる

(城山 藤田)

(六月)

鹿児島県 高校以来だ 嬉しいな

(仙巖園 川西市の源頼光)

(七月)

火山かな さくらもあうらもありがとう

(城山 太子堂のピアノリスト)

過去と今 歴史を繋ぐ フェリーかな

(城山 ニイガタゴミムシ)

展望台 望遠鏡で 遠くまで

(城山 片平 菜月)

靡く木々 あちらこちらへ 挨拶を

(城山 佐藤 一心)

(八月)

初失神 残暑厳しい 鹿児島県

(城山 剛蔵)

薩摩っ子 さいごうさんと 横のポチ

(城山 はっか)

(九月)

池の鯉 金鱗魅せる 太っ腹

(仙巖園 川越のしよび)

みしま村 みしま焼酎 無垢の蔵

(仙巖園 両棒餅美味しい)

桜島 思ったよりも 桜がない

(城山 ホンダ)

自販機のコーラ 売り切れ かなしいかな

(城山 ホンダ)

(十月)

西郷どんに 修学旅行で 会いに来た

(城山 大塚 誠)

The big volcano Stands above the busy town Come enjoy the scene

(城山 Emma)

(十一月)

噴煙が龍に戻って夜が明ける

(仙巖園 戒踊兵)

高台で 望む鹿兒島 ボルケイノ

(城山 シャトーの民A)

城山の ゴミの分別 素晴らしい

(城山 小泉八雲)

桜島 落ち葉の上に 火山灰

(仙巖園 倉崎志保)

仙巖園 最後の最後で あの松かい

(仙巖園 ともさん)

桜島 噴火を減らし 笑い皺

(仙巖園 さとう一徳)

(十二月)

開国を ニセと話した 加治屋町

(維新 かなた丸)

酸化鉄 あなたの心も 還元す

(仙巖園 おすし)

むくむくと 立ち上る灰 桜島

(城山 秘宴)

灰よりも 勇姿に涙の 桜島

(仙巖園 村上幸生)

(一月)

悲しいなあ 悲しいなあ ぴっぴかちゅう

(仙巖園 林檎)

ここに来て 雪と桜に 出会うとは

(仙巖園 つるかめ)

(二月)

気晴らしと たまには行こうかと はや常連

(城山 つるちゃん)

逆立ちの 狛犬乗りし 桜島

(仙巖園 さめ)

仙巖園 でっかいおにわ いいなあ

(仙巖園 もり)

(三月)

不眠夜 柵飛び超える 桜島

(城山 オムライスで

ロングブザービト)

せごどんと さいごうどんは どっちがいい？

(城山 ヤブイヌ)

城山から 志士らも見た 永劫の海

(城山 石原豚木)

鹿児島に はるばる来たよ 西郷さん

(城山 徳重裕士)

息上がり 見上げる先は 桜島

(城山 月影ふあ)

短歌

(四月)

地に響く火薬の音と 死の匂い 全て見届く 悠久の大地

(城山 賢士郎 JF)

新緑の風に連れられ 辿る道志舞う古の武士

(城山 橋口そのみ)

さくら島君の背越しに みる山よわが 心中はけむりの中に

(城山 おくだあい)

頂上で自撮りをしている ジェーケーの 画角の中に 桜島なし

(城山 ヒフミ・

ワゾウスキー)

(五月)

鹿児島島の 城山巡る 船旅は 歴史の痕を 心に刻み

(城山 あらたつ)

せわしなく 城山巡る 船旅の バスから覗く 歴史の痕

(城山 あらたつ)

鹿児島島の 地元心を人問わば 朝日の昇る 桜島山

(城山 鈴木史人)

(七月)

せごどんを 忍び汗かき 一歩づつ 登る城山 人生の糧

(城山 仲宗根 健)

せごどんと チンケ自分と くらぶるに 汗かき登る 城山の坂

(城山 仲宗根 健)

夏の雲 顔を隠して 桜島 熱き心を のぞく頃かな

(仙巖園 よんうん)

城山に 幕府を残し 西郷の 跡形を知り 泡沫と成す

(八月)

台風で 屋久島行けず 悲しきな 大樹の木陰が心を包む

(城山 山本奏羽)

海青し 海原青し 薩摩富士 指宿砂に芋に溺れて

(仙巖園 伊予の西郷どん)

夏の陽に照らされ 照らす西郷どんや兵(ツワモノ)の夢 ここに残せり

(城山 鳩山保歩)

(九月)

東雲の 翠のもと焼き付くは 海馬に染みる 鹿兒島の色

(城山 旅のまにまに菅家)

道順を庭師に聞かば 面差しの 西郷どんや 仙巖園

(仙巖園 川越のしよび)

さくらじま けむりもくもく かつかざん

かならずこよう としおいて

(仙巖園 ゆーり)

(十月)

桜島 噴火した山 友と見て 十年後 また 懐かしむ

(城山 大塚 誠)

(十一月)

思い出の写真を一枚 桜島 後ろに構えて 背中は大きく

(城山 小泉八雲)

桜島 シャッター切れば 鷹が横切る

(城山 ほんぼこぼん)

枯れ柿と 燦々 日照り 気は引けて それでも桜島は堂々

(仙巖園 マジエステイ

田頭)

此の度は 青い吐息で 眺めけり 紅葉のねむり 我が思い出づ
(仙巖園 変な人)

(十二月)

染まり落つ 一葉を照らす 陽光を 嘲笑い吹く 落ち葉風今
(仙巖園 村上幸生)

(二月)

曇天の 頂上霞む桜島 故郷離れし 息子も晴れよ
(城山 つるちゃん)

薩摩路に 母の笑顔を梅の花 咲くや嬉しき 兄弟集いて
(城山 くるみ)

仙巖園 見つめる偉大な桜島 生きる火山は 鹿見島の象徴
(仙巖園 なぐ)

(三月)

小旅行5人で 波打ち際歩く

あいつと2人で 歩きに来よう

(仙巖園 かねしまはると)

噴火かな 眺める噴煙 芝の上

すする鼻には 杉花粉かな

(仙巖園 なおピーマン)

初なのに 雨で見えない 桜島

桜の季節 心が濡れる

(仙巖園 ひろくん)

宇宙(そら)へ行く 輝く星の みちしるべ

見上げる君は 何を問うのか

(城山 月影ふあ)